

文化的景観学の可能性

—「文化的景観学」検討会

公開ワークショップの議論から—

はじめに 景観研究室では、過年度において6回にわたって開催してきた文化的景観研究集会の成果を踏まえつつ、2012年度から『「文化的景観学」検討会』（以下、検討会）を主催している。文化的景観保護の取り組みが進められて10年が経過し、価値付けの考え方や方法、継承のための計画づくりなど、文化的景観をどのように考えていけばいいのか、今、その基盤を担う「学」が求められている。

検討会は、文化的景観の定着と保存・活用の促進等を視野に入れ、多角的に検討するため、複数の学問分野の研究者（都市計画学・歴史地理学・造園学）及び重要文化的景観を有する地方公共団体担当者（北海道沙流郡平取町・石川県金沢市・京都府宇治市・高知県四万十市・長崎県平戸市）の計8名と景観研究室員による構成とした。これらのメンバーにより広い視点から文化的景観の概念・調査・表現方法・計画・技術・制度等の体系化に向けた検討を進めてきた。

議論を重ねる中で、文化的景観が「学」になるために必要なこと、「学」によってできることについて、そのフレーム・考え方について一定の見解をまとめることができた。そこで、文化的景観に関わる様々な関係者に参加を呼びかけ、検討会の中間報告とともに、文化的景観の現在と「学」として求められていることを自由に議論する『「文化的景観学」検討会 公開ワークショップ』を開催することとした。

公開ワークショップの内容 公開ワークショップは、2014年5月31日にキャンパスプラザ京都でおこなった。検討会メンバーのほか、行政担当者、NPO、コンサルタント、研究者など、計44名の参加を得られた。公開ワークショップといっても会の運営上、参加者を限定しての開催となったが、参加を依頼した方々ほぼすべてからワークショップ参加の快諾をいただき、開催前から期待の高さをうかがい知ることができた。

公開ワークショップでは、まず、従前の検討会で議論してきた内容について報告した。続いて、参加者全員が6グループに分かれ、ラウンド1として「文化的景観の枠組みにおける課題」を、ラウンド2として「文化的景

観学を使って何をするか／何ができるのか」について検討した。各グループの構成は、専門や立場ができるだけ多様なメンバーから成るよう留意した。その後、これらの成果をグループごとに発表・共有し、最後に全体での議論をおこなった。

以下、公開ワークショップでの議論の概要を示す。

文化的景観の課題 文化的景観は多様な専門を引き寄せ、行政内の他部局や他の学問領域にまで踏み込むことができる、といった魅力が挙げられた一方、文化的景観に取り組む中での課題も多く指摘された。

第一に、文化的景観そのものの伝わりにくさである。暮らしの場であるがゆえの住民の価値理解の難しさ、若者世代への価値の伝達の難しさ、といった価値共有の必要性が挙げられた。

第二に、産業が衰退する中で地域をいかに守るのか、人口維持の難しさ、近代化遺産の老朽化、といった現状維持に関する課題があった。

また、第三として、従来通りおこなわれる公共事業による価値の喪失や、庁内の各種施策・事業と文化的景観価値との齟齬、といった事業調整に関する課題も、特に行政の担当者や土木系研究者から挙げられた。

第四に、文化的景観の変化の許容幅、ひとつの時代に重点を置かず、決まったカタチで埋めていく方法論と対極にあるがゆえの悩み、といった価値を継承していくための変化と創造に関する指摘があった。

第五に、重要文化的景観に関する課題として、価値分析の整理・統合の方法論の未熟さ、価値と計画のつなぎの悪さ、それらの担い手となる研究者の不足、文化的景観そのものの知名度の低さ、そもそも関係する研究者等が限定的、といった点などが挙げられた。

各グループから挙げられた課題は類似しており、文化的景観に対する問題意識は関係者間で共通するものであると確認できた。

文化的景観学のフレームワーク 上記の保護行政と学術の双方に関わる課題を共有したうえで、文化的景観学のとらえ方について議論した。

まず、検討会メンバーから、「文化的景観学＝価値論（評価）×計画論（持続）」という提案をおこなった。価値論と計画論の間を加法（+）ではなく、乗法（×）としたのは、文化的景観学には双方が必要であり、どちらか

一方が欠けても成り立たない、という意図による。この提案について会場からの賛同を得ることができ、さらに発展的な意見交換へとつながった。

価値論に関しては、本質的価値は、調査の積み重ねから自然に浮かび上がってくるものではなく、飛躍が必要という点で一致した。その本質的価値とは、土地がもつ力を持続可能な状態でうまく利用している生活・生業のあり方を示すものであり、また、地域づくりの意思に合うものであるべき、といった意見が出された。また、文化的景観の主体は地域住民であるため、価値分析の段階から住民と共にこなうことでその後の取り組みもスムーズになるという指摘もあった。

計画論に関しては、価値共有、価値を脅かす要因の分析と調整、地域深化の舵取り、といったキーワードが挙げられた。

さらに、生態学を専門とする研究者からは、文化的景観は変化・進化するものであるため、価値や計画に対するモニタリングとその定期的な見直しの重要性が指摘された。文化的景観という生きた文化財を扱ううえで欠かせない視点であるが、現状では取り組めておらず、先行する生態学等の分野から学ぶところは多いだろう。

文化的景観学と実践 こうした「学」としての考え方を深化させていくため、また文化的景観保護施策を成熟させていくため、実践から学ぶという姿勢や文化的景観で守るという経験を深めていくことの重要性が確認された。現場サイドからは、特に、調査から価値の規定に飛躍する際のジャンプの方法や心構え、文化的景観に関わる調査・計画・整備・活用といった方法のパターン化を

求める声が挙げられた。一方、手法の定型化で文化的景観の本質を見失うことへの懸念も指摘された。

文化的景観学への期待 今回の公開ワークショップを通じて、参加者がそれぞれの立場で抱えてきた課題の打開に対する期待が、文化的景観には込められていることを実感した。それは様々な事業等を実施する際体制や仕組みの「つなぎ」の悪さ打開への期待である。

つまり、目に見える表現形とそれを生み出す内在するシステムによって成り立つ文化的景観は、それらを一体的に理解しつつ、将来に向けて持続的につなぐことを目的としている。そのため、関係する人も専門や立場が多種多様である。行政内では、これまでは事業等をおこなう際に対立的な関係となりがちだった部局同士が、同じ方向を目指し、調整を重ね、変化・進化を検討し、つなぎの良いものをつくっていく。文化的景観という考え方や仕組みを用いて地域を持続させていく、その実践を支えるべく概念および調査・計画等の体系化を目指す文化的景観学への期待は高い。

文化的景観学の取り組みは、文化的景観の保護に関わる多くの行政担当者、NPO、コンサルタント、研究者の関心を集め、公開ワークショップによって検討会の成果について更に深化することができた。景観研究室では引き続き検討会での議論を重ねるとともに、成果の公表に向けた取り組みも活発化させている。 (恵谷浩子)



図50 公開ワークショップのようす



図51 各班による成果の発表